

広島から2017年長崎へ

# 「ヒバクシャ国際署名」をひろげよう

—原水爆禁止2016年世界大会(広島) 報告・感想文集



被爆 71 年の今年の原水爆禁止世界大会は広島。JMITUからは、宇佐美副委員長を団長に、各地から 30 人余りの組合員が参加しました。

8月6日の開会総会では、通し行進者の五十嵐さんとともにリレー旗をもって登壇。2日目は、爆心地の本川小学校平和資料館と旧燃料会館の地下、続いて平和祈念資料館見学など、それぞれ分かれて分科会に参加しました。「核兵器、軍事費とくらし」分科会では笠瀬事務局長が、戦争とものづくのかかわりから平和の大切さについて問題提起、「映像のひろば」分科会では、平和行進の歴史と現在を映像で「追体験」しました。

大会は6日まででしたが、今年は「灯籠流し」を見て帰ろうと、12人がもう1泊。市民とともにあの日の「ヒロシマ」に思いをはせました。

被爆者の年齢が80歳を超えた今年、核兵器禁止条約の締結を求める「ヒバクシャ国際署名」が提起されました。核兵器に決着をつけていくこの署名を、大きな運動にしていきたいと思います。

# 代表団員の感想文から

## 職場の過半数から「ヒバクシャ署名」

通信産業本部・中国支部広島分会 清水 康幸

通信産業本部広島分会のとりくみは、例年7月26日の岡山県からの「リレー旗」の引き継ぎで始まります。

今年は、「ヒバクシャ国際署名」がとりくまれることもあり、7月初旬から職場での署名と募金をおこなないました。

職場の半数を超える20人から署名をいただき、そのうち19人からは募金の協力もありました。(募金は地元尾道原水協に届けました。)

世界大会 in ヒロシマのとりくみでは、5日のJMITU代表団との交流会に参加しました。

「国民平和大行進」の通し行進を経験された方から、20代・30代の組合員まで30人の代表団との交流会では、平和活動や職場活動などが報告さ楽しい交流会になりました。

世界大会 in ヒロシマ閉会集会で壇上から「ヒバクシャ署名を集めるのは、わたしたちだ！」のプラカードを掲げる若者たちに励まされました。

## 核兵器とは共存できない

通信産業本部・中国支部広島分会 八木 素栄子

本川小学校資料館には、「疎開から帰った子どもで両親が揃っていたのは1人のみ、片親だけや両親ともに亡くなって孤児になった子が多かった」とありました。

それを見て、地域の人の話を思い出しました。「原爆が落ちたとき、自分は小学生で疎開していた。広島にいた両親や家族は全滅した。兵隊に行っていた兄弟2人が帰ってきたので3人になったが、親と兄とはちがう。あまりのつらさにどうして両親は自分をいっしょに連れて行ってくれなかったのかと、どれだけ泣いたかしのれない。いまではそれぞれが結婚し、子どもや孫に恵まれた。『3人だったのにこんあに増えてうれしいね』と兄さんたちと話した」。

原爆で多くの家族を亡くした義母も、絶対戦争はしてはならないと口癖のように言っていました。

原爆資料館には久しぶりに行きましたが、多くの子どもたちや海外の人々でいっぱいでした。オバマ大統領の広島訪問は色々あっても、世界に大きな影響を与えました。核兵器とは共存できません。核兵器廃絶を求めます。

## 被爆者の証言、世界のたたかいに力わく

東京・モタイショーワ支部 高見 祐司 (44)

私は原水爆禁止世界大会に以前長崎に参加したことはあったのですが、広島は初めてなのでとても楽しみにしていたのと同時に、この間の参議院選挙で改憲勢力が3分2以上となり、また東京都知事選で

も市民連合が推した鳥越候補者が落選したことを受けてということもあり、私たちが連日国会へ行ったり、集会に参加しデモをしたりしても社会を変えることは、無駄ではないのかという、脱力感・無力感を持って参加せざるを得ませんでした。

しかしながら、この原水禁大会に参加し、2つの大きな力を得ることができました。1つ目は被害者の証言でからあり、2つ目は世界各国様々な人が運動している姿からでした。それは、滞在2日目の私が参加した第6分科会において「被爆者体験の継承・実相普及と援護連帯」の証言と報告に衝撃と激励を受けたのでした。

原爆被爆者の木村さんの証言は、「爆心地から離れた祖父の家で、8歳で被爆し、父は爆心地近くで被爆し三日しか生きられなかった。私は直接熱線に当たらなかったからよかったが、祖父は熱線に当たってしまった。見た時、祖父だとわからなかった。赤鬼のような姿だった。その祖父の看病が、大変で、くさいし、蛆がわく、皮膚がない、組織は壊れ、肉はぶよぶよだった。非常に怖いし、早くあの世に行ってほしいと思ってしまった。それが心にこびりついている。核は、人類と共存できないし、広島、長崎を知ること未来を考えることにつながる。地元に戻って、忘れたではいけない。そこからがスタートだと思う。自分のため、子ども、孫のために活動してほしい。私は、その後の人生がほんとにつらかった。再び被爆者をつくってはいけない。原爆で亡くなった21万人の無念を思い伝えなければならない」というものでした。

その分科会には、マーシャル諸島の上議院議員の子息が参加していました。その方は「ビキニ環礁でアメリカによるブラボー実験の水爆実験によって島民が被曝した。島民全員で別の島に移住したが、頭髪が抜け、皮膚がんや白血病になった。アメリカ政府は島民に対し、医療保障でいろいろな薬を与えていたが、結局それもすべて人体実験であり、政府に対し訴訟を起こしたたかっている」ことを報告しました。

フランスのNPOの方は、「ニューヨークで開かれたNPT再検討会議に参加し、そこでもらった被爆者の証言と写真が載った本をフランス語に翻訳し、学生に読ませたら非常に反響が大きかった。教育が大事で、この本をすべての教育機関や図書館に置くよう、準備をすすめている」と、活動報告しました。

私はこの話を聞いて、JMITUでもすべての支部で、被爆者の証言集を普及させ、みんなに核兵器の恐ろしさを教えていくようなことができればと思いました。

核兵器の使用は、軍人のみならず、民間人・一般市民に対する被害は、計り知れないものがあります。しかしながら、なぜ生物・化学兵器の製造・使用は制限されているのに、核兵器だけは、依然として世界中に15,000発も保有されているのでしょうか。今年被爆から71年を迎え、被爆者の平均年齢は80歳を超えました。残されている時間は多くはありません。しかし、その被爆者をはじめ、国内のみならず世界各国の仲間が、「核のない世界」の実現に向けて、手を取り運動をすすめています。

「核のない世界」の実現に向けた運動の中心は、2020年までに核兵器廃絶を実現するための核兵器禁止条約の締結を求めて「ヒバクシャ国際署名」活動です。私も、署名にとりくみ、「核のない世界」、平和な社会の実現に向けて、今後も運動を続けなければならないと実感しました。

最後に、広島の街は広島焼の店が多いというのもわかったし、また8月6日になると暑くなるというのも本当でした。JMITUの全国の参加者と交流し、親睦を深めることができて楽しかったし、役員の人にもお世話になったことに対しお礼を述べるとともに、今年参加者が30名程度だったので、来年の長崎は、現地に行って体験する人を増やすように参加をよびかけていかなければと感じました。

## 歩き続けることで核廃絶訴える

東京・リガク支部OB（通し行進者） 五十嵐 成臣（71）

長崎から広島までを通し行進し、そのまま原水爆禁止世界大会に参加しました。通し行進をして世界大会へ、今年で連続8回目です。今回の行進は、韓国の青年、キム・ジョングン君とイ・ジミさんの2人と通し行進14回目の武田さんに、佐賀県基山町からは沖縄～広島コースの山口さん、北九州市小倉からは宮崎～広島コースの小林さんが加わっての行進でした。



開会総会であいさつする五十嵐さん

（8月4日）

前半は強い雨、後半は強い日差しが続きました。雨の中は歩く人は少なく、しぶきを上げて走る車の中から手を振ってくれる人、クラクションを鳴らして激励してくれる人。「何をしていますのですか」と質問してくる小学生。「核兵器なくせ。戦争反対のパレードをしているんだよ」と話すと、「がんばってください」との激励。

下関では大学生数人が行進に参加、商店街や住宅地では小銭を握った小学生や折鶴と署名を袋に入れてくれる人、千円札を握って、行進を待っていてくれる人も。こうしたところでは、事前に平和行進の宣伝がなされています。

訪問した自治体では非核平和宣言をしている自治体、平和市長会議に入っている首長も多く、先々で「非人道的な核兵器は廃絶しかない」との激励を受けました。

福岡県内ではJMITU県内リレー旗をつないだ福岡の仲間と、山口では通信の仲間とともに歩きました。58年続けられてきた国民平和行進は、核兵器廃絶へ大きなひろがりをつくっています。

2009年の北海道・礼文島からはじまり沖縄から、長崎からと、日本列島をほぼ歩き終え、後は四国のみとなりました。これからも歩くことで、核兵器廃絶を訴え続けたいと思います。

## いかに現実を伝え続けるか

東京・超音波工業支部 大口 仁（35）

こどものころより、あの戦争については調べていました。また広島、長崎については、その非道性や惨状を文献で調べ、「一度は来たい」「日本人であるならば来るべきだ」と考えていました。

現地で驚いたのは、海外代表が非常に多いこと。国際的にも注目されていることがよくわかりました。一方、国内ではネットなどで中国や北朝鮮を理由にして、日本の核武装をすすめる声が肥大化しているようです。あの惨状を見た人間ならば、狂気としか思えません。いかにこうした人に現実をつきつけ、次代に残していくのが最大の課題とは思いますが、私自身にはその答えが出ません。多くの議論とス

ピーディーな実行がこの平和活動のカギではないかと考えます。

## 来年、長崎もまた参加したい

東京・三多摩西支部 砂川 裕勇・和江

今年も、原水禁大会に参加してきました。初めて参加したのが2000年ですから、もう17年連続で参加しています。この間、毎年顔を合わせるのが、中央の西さん、神奈川地本の矢部さん、東京地本の川口さん、通し行進者の五十嵐さんと、あまり多くありません。最初の数年は、支部派遣で参加していましたが、財政の影響もあり、10年以上自費参加をしています。

今年は、8月4日8時50分に東京を発ち、開会総会に参加した後、宿泊ホテルの「はらだ」で簡単な結団式を終え、1日目を終えました。

2日目は、分科会「映像のひろば」に参加しました。内容は、平和大行進の始まりから、現在に至るまでの苦労などを織り交ぜながらの、ドキュメント映像でした。出発した当初は、数名の行進者で、途中は一人になることもありましたが、日に日に行進参加者が増え8月初めに東京に到着するときには1万人を超える大行進となったということでした。第五福竜丸の展示経緯なども新たに勉強することもできました。大変ためになり、良かったです。毎年、夢の島公園からの出発式と、港区役所までの行進及び西多摩の青梅市役所から福生公園までの行進に参加していますが、体力が続く限り参加していきたいと考えています。ぜひ皆さんも地元の行進に参加してください、高齢化がすすみ、参加人数が減り続けています。

来年は長崎大会ですが、何も障害がなければ夫婦で参加したいと考えています。何度参加しても、新たな平和への誓いを立てることが出来ます。また、時間のある方は、鹿児島県の知覧まで足を伸ばして、知覧特攻平和会館の見学をするのもおすすめです。戦争はやってはいけないとの思いで涙がこみ上げてきますよ。

## 今後もうこうした活動を続けて

東京・東洋精機支部 佐々木 正浩 (38)

大会に初めて参加して思ったことは、今まで自分が想像していた以上に原爆の威力が大きかったということです。TV、教科書などでしか見たことがなかったのですが、今回、実際に広島に来て遺跡、資料館を見て、なんとなく「こんな感じかな？」と思っていたことが、間違いであったことに気づかされました。

今後も、こういった活動を続けていってほしいと思いました。

## 平和大行進の映像に感動

東京・日本NCR支部 横手 時光 (52)

遺跡・資料館めぐりの後の午後、映像の分科会に参加しました。今回は平和大行進の映像でした。東京から広島まで、1000キロを歩き続けていることにまず感動しました。行進を通じて、平和への思いが伝わってくるようでした。

第五福竜丸の通信長が、「原爆で死んでいくのは私で最後にしてほしい」という言葉が心に残りました。

原水爆を使用しないというのはもちろんですが、福島原発の事故被害者も忘れてはならない。今回の映像分科会にも、ロシアの代表が参加していましたが、海外代表が多いことにも感動しました。初めての参加でしたが、いろいろと勉強になりました。

## 平和の担い手ひろげ「ヒバクシャ署名」を

神奈川県本 矢部 常次 (67)

「いつ来るのかナーと待っていた」と言って迎えてくれた、お好み焼（ビタミンユウ）のママさん。「今年は顔が白いのでは？」（笑い！）と、お客さんと混んでいるのに話してくれた。このお店は、私たちJMITU（旧JMIU）が広島での世界大会参加でいつも宿泊しているビジネス旅館「はらだ」の目の前にあります。旅館の裏には本川小学校（平和資料館）があり、原爆ドームも歩いて10分くらいと原爆の実相を学ぶ上でも観光でも楽しめる場所です。

開  
登  
壇  
（  
8  
月  
4  
日  
）  
開  
会  
総  
会  
で  
、  
五  
十  
嵐  
さ  
ん  
ら  
通  
し  
行  
進  
者  
と  
と  
も  
に



私の場合、メイン会場が長崎の時も、東京から広島コースの平和大行進で毎年参加しているので、「はらだ」にはもう20年以上お世話になっています。最近「ただいまー」と旅館に入ります。旅館には東京土産を買って行き、主人とおかみさんとも、我が田舎に帰ったように話すことができました。

今年は、いくつかの感動、学ぶことがあります。まずは、国民平和大行進・JMITUリレー旗行進です。東京から広島コースの広島県内は今年、通信産業本部の仲間にお願ひし、東京などから人を派遣するための特別の措置はとらないとなりました。しかし通信産業本部の広島の組合員だけではすべての日程をつなぎきくことは無理です。今後は、広島に営業所をもつ全国の支部と組合員に協力をお願いする必要があると感じました。

広島でリレー旗行進は、通信産業本部の広島の組合員に加え、今年も金属反合の長谷川さん、戸沢さん、石播で闘った豊田さん、また他の争議を闘った新ちゃんこと子安さんの4名の協力が無事、リレー旗が広島に到着しました。長谷川さんは20年以上行進に参加しているので、広島県内でのJMITUへ

の信頼は厚いものがあります。リレー旗行進を継続発展させていくためにも、組合を拡大・強化し、日頃から平和運動分野でもがんばる仲間を増やしていくことが重要と感じました。

第2に、私だけかとは思いますが、05年、10年、15年とNPT再検討会議に参加してきたこともあり、世界の多くの友人と再会できる感動です。今年も、アメリカ奉仕委員会のジョセフ・ガーソンさんと握手し、話げできました。

平和公園では、高校生が影絵で核兵器のない世界を訴えていた（8月5日）



今年は特に元国連軍縮問題担当上級代表のセルジオ・ドゥアルテ氏。10年のNPT・国連前で、日本からの「核兵器廃絶署名」を国連代表として受け取っていただきました。今回、握手をし、全労連国際部長の布施さんの通訳で話をすることができました。セルジオ・ドゥアルテさんからは、「2020年のNPT再検討会議に、組合をはじめ多く仲間と日本から来てほしい。運動の成果を持ち寄り、アメリカでお会いしましょう」と激励されました。

私は「お金もかかるので、昨年9月より貯蓄しています。参加を決意しています」と答えたら、再度親しみを感じ握手していただきました。

このほか、国際青年リレー行進に参加してくれた海外の仲間とは、昔からの知人・友人のように話をすることができました。

第3には、「被爆者が訴える核兵器廃絶署名」（ヒバクシャ国際署名）へのとりくみです。2020年までの期限として毎年10月に国連に提出する、署名目標は数億人です。

今年3月に提案され、実際には5月にその署名を見ていましたが、私自身まだ何もできていません。今回の提起は「署名の数も重要だが、どれだけ主体的に運動にかかわる人を増やすことができるかを重視」していることです。

「セルジオ・ドゥアルテさんとの約束」もありますが、本気でやり切る決意があるかが問われていると感じた広島でした。

## 機会あればまた参加したい

長野・マグネエース支部 瀧澤 弘樹 (36)

今回初めて原水爆禁止世界大会に参加しました。他の支部のみなさんと長時間交流でき、よかったと思います。平和公園での記念式典は、今までテレビで見えていましたが、今回、生で見ることができ感動しました。原水爆は、なくしていかなければならないということを伝えていきたいと思います。機会が

あれば、また参加したい。



本川小学校平和資料館に転じされている焼けた配電盤（8月6日）

## 広島を悲劇を忘れてはいけない

京滋・カシフジ支部 池田 響弥（22）

今回初めて、原水爆禁止世界大会に参加しました。

正直今まで自分は、日本は平和で戦争なんて起らないと思っていました。しかし日本は平和であったとしても、他の国が核兵器を保有していると、日本も核の脅威に怯えることになります。これは、ほんとうの平和とはいえません。世界にはいまだに1万5000発を超える核兵器があります。この核兵器をいち早くなくさないといけないと思いました。

そのために、どのようなことをすればいいのかわからない、ほんとうの平和とは何かを今後は考えていけるようにしたいと思いました。広島を悲劇を忘れてはいけない！

## 被爆者の話をじかに聞けてよかった

京滋・カシフジ支部 平田 拓巳（18）

今回初めて原水爆禁止世界大会に参加し、核兵器の悲惨さといろんな国の人々が核兵器をなくすために署名活動などおこなっていることを学びました。

平和祈念資料館に行って、被害に合われた人の着ていた被服や放射線や熱線をあびた人の写真などを見て、核兵器の恐ろしさを改めて感じました。広島に原子爆弾が投下されてから71年もたっているのに、当時のことは資料館を見て知るしかないと思っていたのですが、じかに被爆者の話を聞けてよかったです。もう二度とこのような被害が出ないよう、核兵器はなくしていかなければならないと思いました。

知らないことが知れて、よかったです。

## 「話すこと」「行動すること」—再び勇気

京滋・カシフジ支部 山中 康司（45）

いま「平和」という言葉の意味を、もう一度「体験して考え直す」必要があると思って、今回、参加

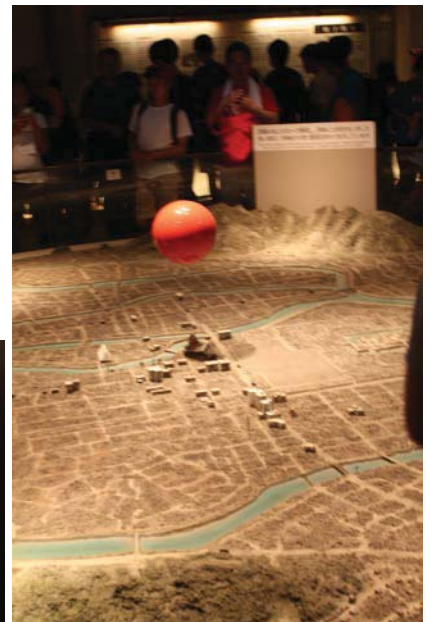


を決意しました。

戦争法が強行可決され、イスラム国（以下：IS）によるテロが世界中に拡散し、私たちにとっても「関係ない」話ではなくなってきました。わが支部の草川委員長とも「戦争がはじまり、日本も巻き込まれるな」。こんな会話が成立します。



本川小学校平和資料館のあと、旧燃料会館（現在レストハウス）地下を見学（写真上・下）。あの日、たまたま地下で作業をしていた1人だけが生き残りました



平和祈念資料館。原爆と爆心地の模型が展示されています

## 「話すこと」「行動すること」—再び勇気

京滋・カシフジ支部 山中 康司 (45)

いま「平和」という言葉の意味を、もう一度「体験して考え直す」必要があると思って、今回、参加を決意しました。

戦争法が強行可決され、イスラム国（以下：IS）によるテロが世界中に拡散し、私たちにとっても「関係ない」話ではなくなってきました。わが支部の草川委員長とも「戦争がはじまり、日本も巻き込まれるな」。こんな会話が成立します。

確かに中東地域の「遠い話」と感じるのとは仕方ないかもしれませんが、私にはISがテロを連続して犯行に及んでいる、もうすでに「宗教戦争が始まっている」と感じています。いまの静かな時間は、大国が「戦争準備を始めている」時間だと。「仏教・八百万の神は関係ない」。確かに、宗教的には関係ないかもしれませんが、「集団的自衛権」は、そう言ってくれません。そう考えると、いまは「戦争前々夜」というくらい現実的になっているのでは？ そう感じています。

私の祖父、父方も母方も戦争で亡くなりました。その事で、両親とも苦勞して育ったことを小さいときから聞かされました。自分の将来、未来の子供たちのことを考えると「戦争はいややな」と心からそう思います。誰も、どの親も子供に「苦勞」させたいとは思いません。また「人を傷つける」のもいやだし、戦争で「人を殺す」姿も想像したくありません。あわせて職場は「工作機械」を製作しています。この工作機械は、当然「兵器」の部品も加工します。日々の仕事「人の生活が豊かになるために」とか「より便利になるために」と思って仕事をしています。だからこそ「やりがい」を感じるわけです。「人を殺すため」に、仕事しているわけではありません。太平洋戦争では、当時の社長も徴兵され、さらに軍需工場として、戦闘機の部品を作っていた歴史もあります。学徒動員で、多くの学生が働いていた記録もあります。多くの人の人生を奪ってしまう。だから私は「戦争はいやだ」と言い続けたいと思います。

原水禁大会に参加する前に、わが母校の立命館大学の平和ミュージアムに行って、見学しました。3回生の女子大生が「特別展示しているパネルの説明を…」ということで、説明を聞き、改めて考えさせられました。「平和とは、安全・安心ですべての人が自己実現できること」という定義から、説明がありました。私も、立命館時代に聞いて、そう感じている言葉です。でも、理解して他人に説明するのは難しい言葉です。その難しい言葉をキッチリ彼女は理解し、思いを伝えてくれました。すごく良い体験でした。

カシフジでは、いつも原水禁大会の参加前に、参加者と「学習会」を短時間ですがしています。私は性格が意地悪なので、彼らに意地悪な質問をします。「(あなたの) 平和って、なんですか?」「今の日本って平和ですか?」この2問です。3問目は「参加して、平和に対する考え方は変わりましたか?」です。

今年の2人は「平和は『安全』あること」。「安全」の中に「平和」があると、答えてくれました。そこからディスカッションし、「平和」の言葉の意味を考えてもらいました。まだ、帰ってきてから「じっくり話」を聞いていませんが、問3の答えが、変わってくれていることを期待しています。

私は、そして草の根の運動は「話すこと」「行動すること」だということを、再び感じ勇気と自信をもたらした大会参加になりました。

## 一人ひとりが声を上げ行動に



全国青年部（大阪・日立建機ティエラ支部） 山下 伸二(27)

今回参加して、改めて人間と核の共存は不可能だということを強く感じました。

核軍縮がすすんだ現在でも、世界には多くの核兵器が存在し、ひとたび戦争がおき、核兵器の数%が使用されただけでも人類が滅亡の危機にさらされます。核兵器の使用を防ぐ最大の保証は、廃絶することです。

平和公園での遺跡めぐりでは、反核・平和を願うボランティアの方から説明を受けました。8月6日の朝被爆し、熱線で皮膚がただれ、水た川で、多くの人が数日のうちに亡くなりました。

平和祈念資料館では、海外から訪れた人の多さに驚き、平和にたいする思いは共通なのだと思います。広島に投下された原爆についての説明、放出された放射線や熱線、爆風によって被害を受けた遺品が今でも数多く展示されており、核戦争の悲惨さをひしひしと肌で感じました。

核兵器廃絶は簡単に実現することはありませんが、一人ひとりが声を上げ行動することで、大きな力となり、二度と同じ過ちをくり返さない世界に変えていけるのだと思います。今後も、周りの一人でも多くの人を巻き込み、平和運動にとりくんでいこうと思いました。



## 自らと、労働組合が試される

代表団事務局（中央書記局） 西 正和（59）

前回2年前の広島で、爆心地・平和公園の一角にある旧燃料会館（現レストハウス）の地下を初めて

見学することができました。今回、本川小学校の平和資料館で焼けた配電盤などとともに、12人でその地下を見学しました。前回の広島で日本NCR支部の岡山さんから、「あの地下に入ったことありますか？見た方がいいですよ」と言われ、日程を一日延ばして見学しました。

あの日、爆心地で生き残ったのは、本川小学校の当時小学6年生だった居森清子さんと一人の教師。それに、その「地下」でたまたま作業をしていた野村栄三さん（1982年82歳で死去）らごくわずかです。野村さんはその後、「元安川の竜巻と大火事」など多くの「原爆の絵」を残しています。今回は、みんなでその地下も見学し、「あのとき」を迫体験し、核兵器の廃絶と平和を考えました。

今回、資料館はいつもよりゆっくりと見学。今回も、会場出口の廊下に設置しているビデオで、被爆者の体験談を聴きました。毎回、同じような行程での「ヒロシマ」。でも、毎回、毎回、自分の目と心で「ヒロシマ」を感じ、刻むことが大事なのだと感じます。矢部さんはじめ「もう7～8回は広島に来ている」という代表、「久しぶり」という代表。みな同じ思いなのだと感じます。

被爆者の平均年齢が82歳になりました。残された時間は長くありません。その被爆者が核兵器禁止条約の締結に向けて共同し、「ヒバクシャ国際署名」をよびかけました。3年半後のNPT（核不拡散条約）再検討会議に向けた世界数億人規模の署名運動。核兵器廃絶問題に「決着をつける」ための署名であり、被爆者にとっては、「目が黒いうちに」と訴えながら廃絶への扉が開くところさえも見ることなく先立った被爆者の思いも込めた、「最後のたたかい」になるのではないかと感じます。

核保有国や安倍政権は「核兵器は平和のための抑止力」などと強弁します。しかし、戦争となり核兵器が使用されたとき、その後といったい何が残るのか。湯崎広島県知事が祈念式典でのたように、「抑止力論」は「観念論」であり、最大の誤謬です。そうした世論がいま、世界でも国内でもひろがっています。

今年2月、「核兵器のない世界」を実現するための具体的な方法を議論する国連の作業部会がスイス・ジュネーブで議論されました。国連で初めて核兵器禁止条約の議論がなされ、核保有国や日本政府の反対に抗して、禁止条約のための国際会議を来年に開くとの賛成多数で決議されました。

毎年10月の国連総会、そして2020年NPT（核不拡散条約）再検討会議に向け、自らを含め、被爆国日本の国民一人ひとり、そしてより労働組合が試されます。みなで大いに議論し運動し、運動しながらまた議論する。そして平和のとりくみを通して労働組合も強くする、そうした運動になるようがんばりたいと思います。

## 被爆二世としてどう向き合うかを

副団長（東京地本団長） 川口 英晴（60）

長崎大会がメインの時には、ほぼ毎回参加していますが、広島大会には3回目の参加となります。15年前までは、職場の広島営業所があり、年2回、職場討議にも出かけていました。営業所が閉鎖されて以降、広島に行くのは久しぶりで、駅前もビルが乱立し、広島市民球場も更地になり、大きく変わったなという印象で大会会場に到着しました。

2日目の原爆遺跡めぐりに参加し、宿のそばの本川小学校をスタートに平和公園を巡る中、原爆資料館のリニューアルを除いては、変わることはない平和公園のたたずまいに、改めて、平和への広島の思い、祈りを

感じました。

今大会はオバマ米国大統領の広島訪問を受け、色々な思いが錯綜した大会でした。非人道的な大量殺戮兵器を投下した米国の大統領としての謝罪が無かったことに憤る被爆者、それでも米国大統領が被爆地を訪問した意味を受け止めて新たな展望につなげていこうと、新たな署名活動呼びかけの被爆者など、複雑な思いを感じながらの参加でした。

大会では、世界各地で草の根からの運動が積み重ねられ、「核兵器の先制不使用」「核兵器禁止条約」の実現に向けで着実な前進を作られていること、こうした動きに水をさす安倍政権の好戦的な危険な動きをストップさせ、唯一の被爆国日本の国民に課せられた役割を果たしていくことの重要な意味を再認識させられました。

残念ながら東京地本の執行委員で参加する方が無く、責任を取って団長の任を勤めることになりましたが、来年の長崎大会には次の世代の皆さんに積極的に参加をしていただけるよう、今度は引率として参加を呼びかけていきます。

被爆二世という私自身の出自に照らし、核兵器なくせのたたかいに、どう向き合ってきたのか、自問自答しながら大会を終え、山口に転居した友人を訪ねる旅へと向かい、世界大会を終えました。

## 核兵器廃絶へ、新たな決意もらう

団長（通信産業本部） 宇佐美 俊一（62）

8月4日から開催された原水禁世界大会に、JMITU代表団として初めて参加をさせていただきました。

到着した4日の広島駅は大会会場へ向かう人であふれ、大会会場は全国から平和の旗を広島の地につないできた人たちや、家族連れなどでごったがえしていました。

全国から集まった代表団、世界各国の代表団が、世界平和への思いを込めて被爆地・広島に集い、「世界から核兵器を無くそう」と思いを込めて熱く語り、被爆者からは、戦争の悲惨さと原爆の恐ろしさが体験談として語られました。

一人でも多くの人に、二度と使われてはならない兵器だという事実を伝え、核兵器の恐ろしさを知ってもらい、この様な兵器が二度と使われないために、「核兵器の廃絶が必要だ」という思いが非常によく心に伝わりました。多くの仲間にもできる限り参加をしてもらいたいと強く感じました。

二日目には、宿泊所近くに被爆時の現状が地下に保存されている本川小学校を訪問、当時の惨状の一部を目にし、原爆資料館等も見学しながら、少し足をのぼして広島城郭の半地下に作られていた防空作戦室も見学に行きました。ここは爆心地から790メートルの地で被爆し爆風で破壊されましたが、被爆しながらもこの通信を担当していた女性が、その被害の第一報を発信した場所だと伝えています。

多くの若い仲間と共に参加をし、年代は違ってもこの地で感じる思いは同じであり、仲間として語り合える場がもてたことも大きな収穫でした。

最後に1日延長して、原爆ドームのそばを流れる元安川で、被爆者の冥福と恒久平和を祈って開催されている「ピースメッセージとうろう流し」を見学しました。

地元の人達や大会に参加された人達と、多くの外国人も灯籠にメッセージを書いて川に浮かべており、参加希望者の列が川岸から土手の上の公園内へと絶えることなく続きました。平和を願う思いの強さを認識し、夜の川面に流れる灯籠の光とあいまって最後の感動をもらい、「核兵器廃絶」への運動に新たな決意を固めた4日間でした。